# 蔵王町の歴史と文化財

どきたん通信
No.010 我妻家住宅特集号
令和8年（2026年）3月発行
蔵王町教育委員会 生涯学習課

## 国指定重要文化財・我妻家住宅の保存修理工事が完了！
## 2度の地震を乗り越え4年ぶりに一般公開はじまる

茅葺屋根の葺き替えと土壁の修理を終えた主屋。今後定期的に一般公開される。

曲竹地区の我妻家は、鎌倉時代から続く旧家です。現在残る主屋は江戸時代中期の宝暦３年（1753）に建てられたもので、今年で築273年を迎えます。我妻家住宅は、県内に残る茅葺民家の中で最古級・最大規模のものとしても知られています。主屋を中心に、蔵４棟、表門、宅地を含め、その良好な保存状態から国の重要文化財に指定されています。

**令和３・４年 福島県沖地震の災害復旧**

伝統的な建造物は、建物の材料や構造において地震には弱い面があります。我妻家住宅では、令和３年２月・令和４年３月の福島県沖地震によって建物がゆがんだり、土壁が落ちたりするなどの大きな被害を受けました。また、主屋や一部の蔵の屋根などに劣化が進んでいたことから、令和３～７年度の５か年に渡り、土壁の塗り直しなどの災害復旧工事と、屋根や床の経年劣化に伴う保存修理工事の二つの工事が同時並行で行われました。

土壁は防火・耐火性能に優れており、湿度を調節する機能も持っていることから、家財道具や食料を収納する蔵に多く用いられました。伝統的な工法による土壁は、柱の間に竹を縦横に編んだ「竹木舞」と呼ばれる下地を組み、藁スサを練りこんで発酵させた粘り気の強い土を付ける「荒壁付け」、砂の入った土で荒壁の凹凸を均す「中塗り」、漆喰による「仕上げ塗り」の工程で作られます。我妻家住宅では、前蔵と文庫蔵が漆喰仕上げ、主屋と穀蔵が中塗り仕上げで作られています。かつてはどの地域にも左官職人がいましたが、現在では伝統工法を習得した職人は数少なく、今回も県外各地から集まった職人によって作業が進められました。

地震で被害を受けたのは土壁だけではありませんでした。文庫蔵では建物全体が傾斜したために、敷地内にある屋敷林（居久根）の大杉と柱をベルトで固定して引き寄せることで建て起こす作業や、２度

の地震によって礎石から位置がずれた表門の修復も同時に行われました。

また、主屋では文化庁の指針に基づき、耐震基礎診断が行われました。これは、建物の構造が地震などによる荷重に耐えられるかを確認するものです。診断の結果、一定程度の安全性が確保されており大規模な対策を講ずる必要はないと判断されました。一方で、これまでの地震被害によって柱と梁の接続部分には一部でゆるみが生じていたことから、柱と梁を引き付けて補強金物を取り付けることで健全性を確保しました。

**20 年ぶりに主屋の大屋根を葺き替え**

茅や木の板などで葺いた屋根は、経年劣化を起こすため定期的な葺き替えが必要になります。今回の修理では、主屋と前蔵、板蔵の屋根葺き替えが行われました。主屋の大屋根は山茅を使った茅葺き、前蔵と板蔵の屋根は栗の板を使った「こけら葺き」と呼ばれるそれぞれ伝統的な工法で葺き替えられました。

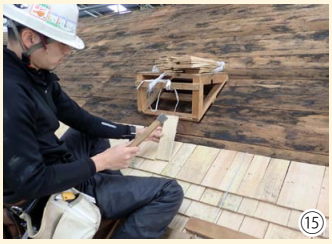
手に入りやすかった植物性材料を用いた屋根は、各地の伝統建築で多く用いられてきました。茅は茅葺屋根に用いられる植物の総称を指しており、水辺であればヨシ、山であればススキというように、地域で手に入りやすい茅が活躍してきました。良質な茅を手に入れるために人の手によって茅場の維持管理がなされてきましたが、時代とともに減少し、今ではほとんど残されていません。

主屋、前蔵では屋根の葺き替えと土壁の塗り直しの両方を行う必要がありました。そうした建物では、いずれも屋根の葺き替え作業から行いました。これは土壁が乾燥した後に、新たに葺き替えられた屋根の荷重によって、修復後の壁に亀裂が入ってしまうことを防ぐためです。災害復旧と通常の保存修理工事とを同時並行で進めるための工夫が採られました。

我妻家住宅は主屋を中心に数々の蔵や門が残されており、宅地の景観も含めて江戸時代の豪農の暮らしぶりを伝える貴重な文化遺産です。所有者をはじめ、国や自治体、多くの技術者と皆さんの協力によって 5 か年の保存修理工事は完了を迎えました。蔵王町の貴重な文化遺産はこれからも永く受け継がれていきます。

**工事前の我妻家住宅**　①主屋。令和 3 年に発生した地震によって土壁に亀裂が入り、②さらに令和 4 年の地震によって、より深い層まで亀裂が入るといった被害を受けた。③主屋。建物の構造は十分な耐震性能を持つことが分かったものの、これまでの被害の蓄積で柱と梁の接続部にゆるみが生じていた。④主屋。茅葺屋根は長年の風雨の影響で劣化し、苔が生えていた。⑤文庫蔵。地震により漆喰塗りの土壁が大きく崩落した。⑥板蔵。地震によって壁板がずれた。⑦板蔵。葺き替えて約 20 年を経たことと、杉の葉の堆積により、板葺きの屋根が劣化した。⑧穀蔵。土壁が崩落し、下見板が外れた。⑨前蔵。漆喰塗りの壁が大きく崩落した。⑩前蔵。葺き替えて約 40 年が経過し、こけら板は劣化して薄くなり苔が生えていた。⑪⑫表門。地震によって柱が礎石からずれた。また、経年劣化によって一部の柱の根元が傷んでいた。

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

**施工中の様子（こけら葺き）** ⑬水に強く腐りにくい栗の木を手割りした「こけら板」を一枚ずつ釘止めしていく。「こけら板」は木材の繊維を壊さずに手割りで製材することで、水はけや風通しが良くなり長持ちする。⑭板同士の隙間は、気温や湿気による膨張等によって隣り合う「こけら板」が干渉しないように、また、水はけを良くする役割を持つ。⑮こけら葺きに用いられる金づちは、柄が短く、頭の部分がサイコロのような形をした専用のもの。⑯「こけら板」を止める釘には伝統的な竹釘が用いられた（今回はステンレス釘も併用）。竹を細く割り、煎ることで硬くしたもの。⑰数十本の釘を口に含み、舌と唇を使って向きを揃えながら、一本ずつ出して打ち付ける。⑱下から順に端を一直線に揃えながら板を止めていく。伝統技法を行える職人が少ないことから、中部地方から出張してもらっての作業となった。⑲葺き替えが完了した板蔵。棟（屋根の最上部）には銅板で包んだ「樋棟」を据える。⑳主屋の縁側に置かれた前蔵の「樋棟」。長さ約 12m で、3 つの材を組み合わせて作られている。板蔵と同じく銅板で包んで棟に据える。

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

**施工中の様子（茅葺き）** ㉑主屋の茅葺屋根には石巻市内で収穫された山茅を使用。茅材は長さが 2m 以上もあり、約 3,800 束が使われた。㉒古い茅材が取り除かれた下地部分には、ヨシズが張りめぐらされている。折れていたり、もろくなっていたりしている箇所は修復して再利用された。㉓㉔茅は屋根の下から上へ向けて葺いていく。長い針を屋根から建物内に通して、縫うように縄で茅を固定していく。㉕棟付近の茅は短くなり、また、荷重がかからないために抜けやすいので、杉の皮と葉を挟むことで抜けにくくした。加えて今回は鳥獣等が茅を抜くことを防止するために棟部分に銅網を巻き付けるという工夫を試験的に取り入れた。㉖㉗㉘葺き替えが完了した主屋。刈り込み作業のほとんどがハサミによる手作業で行われ、屋根全体を平らで滑らかになるよう切りそろえていく。葺き上がりの屋根の大きさや角度、形状は毎回微妙に趣が異なる。職人による独特な曲線と直線とのバランスは芸術作品のようにも思える。

㉙

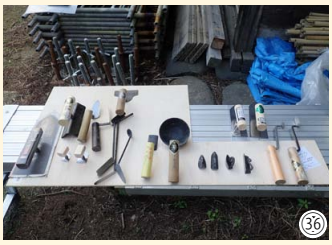
㉚

㉛

㉜

**施工中の様子（耐震診断など）** ㉙主屋の耐震性能を調べるため、周辺のいくつかの地点でボーリング調査等の地盤調査とコンピューター上でのシミュレーションを行った。㉚調査の結果、構造上の耐震性能は十分であることが判明したが、地震によって生じた柱と梁の接続部のゆるみを健全な状態に戻す必要があった。ベルト等を用いて引き戻す作業が行われた

が、建物への負荷を小さく抑えるため１日に数ミリずつ戻していった。㉛柱と梁の接続部を補強する金物は、兵庫県にある町工場で製作された。我妻家住宅のために製作された一点物の特注品だ。㉜製作された金物は、「ボルトはナットから２～３山だけ出す」というような細かい指示・調整を経て装着された。こうした補強金物は建物の景観を損なわないように目立ちにくい黒色などで着色された。



**施工中の様子（土壁）**　㉝土壁には藁スサ（細かく刻んだ藁）を混ぜ込んで発酵させ、強い粘り気を持たせた土を用いる。㉞竹を十字に組み上げた「竹木舞」を壁の骨組みにして荒壁土を付けていく。㉟粘土質で密度の高い土を団子状にして、木舞に押し付けていく「荒壁付け」。裏側にはみ出た土は反対側からの壁土と一体となるように塗り返す。㊱工程に応じて、または様々な意匠を施すために多種多様な鏝が使われる。㊲木舞から垂れ下がる縄は、壁土を塗る際に八の字に広げながら壁に伏せこんでいくことで肌別れによる剥落を防ぐためのもの。㊳荒壁付け後の工程「中塗り」。荒壁より粒が細かい壁土で塗り重ねていく。壁面の凹凸を均すための「斑直し」と呼ばれる工程も都度行われる。㊴漆喰塗り。写真は土蔵の防火のために軒裏に付けられる「鉢巻」と呼ばれる部分を補修している。㊵左官工事が完了した文庫蔵。壁土を幾層にも塗り重ねていくことで防火、断熱、蓄熱、調湿等の効果を実現する。１層ごとに十分に乾燥させた上で次の層を塗り重ねるために多くの日数を必要とする。作業する職人の人数を増やすだけでは解決できない工程である。

**完成後の我妻家住宅**　㊶約 20 年ぶりの葺き替えを終えた長さ約 38m にも及ぶ長大な茅葺屋根は圧巻。㊷亀裂の入った土壁は塗り直され、ゆるんだ仕口も補強された。玄関から差し込む光に屋根を支える小屋組みが映える。㊸広範囲にわたって崩落した土壁は漆喰塗りによる純白の壁を取り戻した。㊹ずれた壁板が戻され、屋根は新たに葺き替えられた。木造ならではの風合いが魅力的。㊺地震によって崩落した土壁を塗り直し、外れた下見板を装着した。主屋と同じく中塗り仕上げ特有の自然な質感に修復した。㊻漆喰壁の端正な外観と、屋根に整然と並んだこけら板が美しい。㊼㊽柱を礎石の上へ戻し、不朽した部分は根継ぎと呼ばれる伝統工法で修復した。

## 重要文化財 我妻家住宅の一般公開について

日程　毎月第３日曜日（8 月、12 月、1 月を除く）
時間　10：00 ～ 16：00（2 月、3 月は 15：00 まで）
入場受付は終了の 30 分前までとなります。

※我妻家住宅は**指定公開日のみの公開**となります。公開日以外の敷地内への立ち入りや外観のみの見学もできません。
※地域事情などにより変更・中止となる場合があります。

**蔵王町の歴史と文化財　どきたん通信　No.010**
令和８年（2026 年）３月発行　［不定期発行］
蔵王町教育委員会 生涯学習課 文化財保護係
〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10 番地
蔵王町役場東庁舎 文化財整理室内
TEL 0224-33-2328　FAX 0224-33-3831
E-Mail info@dokitan.com　WEB https://www.dokitan.com